
「全てはマイケルから始まった 一ボクの国際協力への道」

～鹿児島発の撮り鉄、国際支援で地方活性化をめざす～

JICA 中南米部 中米・カリブ課 職員 井村 皓一

- ドミニカ鹿児島県人会とコラボ企画を実現したい！
- 自分の足で現場や人を理解



●マイケルとの出会いが国際協力活動へのきっかけ

「マイケルの作りたかった世界を作るにはどうしたらいいかを考えて、途上国支援を意識したんです。単純に歌やダンスだけじゃなく、貧しい子供たちのためにチャリティをやり続けた姿がかっこいいと思ったんです」

中学1年の6月にマイケル・ジャクソンが亡くなった。報道で目にするマイケルの姿に衝撃を受け、CDやDVDを買い、自伝を読み、「We are the World」でアフリカ救済や社会活動に貢献する姿を見て、瞬く間にとりこになった。

地質学者の父、獣医の母のもと福岡で生まれ、両親の社会へ貢献する背中を見ながら鹿児島で育った。血を見るのが苦手な医学への道は考えなかったという。大学までは野球一直線。机には阪神グッズやSL乗車券が。週末は父親譲りのニコン2台をぶらさげ、日本全国鉄道めぐり。約3年前に始めた鉄道写真はコンテストで入賞するほどの腕前。自ら「オタク気質」と称する筋金入りの撮り鉄だ。



山口線(井村皓一撮影)



SL人吉を撮影する井村さん(左)、右はその時の肥薩線のSL人吉(井村皓一撮影)。この撮影後、豪雨災害で不通となり復旧が待たれる

●迷い：法律は現場で役に立つのか？

マイケル・ジャクソンをきっかけに途上国支援を意識し、国際機関、国連職員をめざし国際法を専攻しようと法学部へ。入学直後の4月、熊本地震が起こった。2週間後に被災地へボランティアに向かったが、被災者と接するのはこの時が初めてだった。現場で法律が役に立つのか、法学部でよかったのか、頭をよぎった。大学1年の5月のことだ。

●故・中村哲先生のアドバイスを胸に、自分の足で現場へ

葛藤の中、福岡市内で開かれた故・中村哲先生（2019年アフガニスタンで銃弾に倒れた）の講演会があり「現場を見た方がいい」とアドバイスを受けた。大学の先輩であり、国際協力活動の第一人者である先生の言葉に背中を押され、自分の足で現場を見てみよう、と、大学2年の夏、内閣府の海外研修事業を探し応募した。野球部だったこともあり、野球の盛んなドミニカ共和国の研修に2週間参加した。

●マイケルの踊りが大ウケ、国際交流の一助に

「マイケルの踊りはおまけで。ビデオ見ながら練習はしましたけど。ドミ共のホームステイ先ファミリーとの懇親会でマイケルのダンスを踊って大ウケしたんですよ」



マイケルが国際交流のツールだと振り返る。

「マイケル・ジャクソンが国際協力のきっかけになっただけでなく、国際交流の一助になっていますね」

大学2年の時、ドミニカ共和国にて。日系移住地を訪問した際の交流会での一コマ

ドミ共での研修のあと、福岡県の研修プログラムでミャンマーへ足を運んだ。

「途上国を実際に訪問した時の経験は、ボクの国際協力の原体験なんです」

タナカを塗ったミャンマーの子どもと井村さん（左）。タナカは2千年の歴史を持ち、日焼け止めの効果があるミャンマーの伝統的な化粧品。現在も子どもから大人まで広く使われている



●世界情勢に跳ね返る、前例ない緊急対応の契約で手ごたえ

JICA 入構後、調達・派遣業務部の契約事務を担当。2022 年 1 月、トンガの火山噴火の緊急援助で高圧洗浄機などを日本から送る契約に携わった。国際緊急援助隊・自衛隊部隊による輸送で、前例のない契約。しかも刻一刻と変わる情勢に対峙しながら、一時間単位を争う仕事だった。

「自衛隊が何時に出るから納品は何時でとか、緊急対応で。物資が現地に届いたと形になって世界情勢に跳ね返るのを体感して、誇りに思える仕事でした」
期限やルールがある中、どう工夫したらよいか、柔軟性が求められた。鍛えられた”マイケルの調達契約テクニク“は現在、課内職員へフィードバックされている。調達手続きの際には「マイケル～出番!」と声がかかることも。

●パナマでモノレール事業、コスタリカで地熱事業を担当



2022 年 5 月から JICA 中南米部に配属。パナマでモノレール事業、コスタリカで地熱発電開発事業というインフラ系案件のほか、障害者支援事業なども担当している。鉄道事業ならトンネルは地質、橋脚は土木、駅は建築など、複合的要素（地質・土木・建築）の多角的な視点が必要だ。

パナマメトロ 3 号線建設事業は現在モノレール橋脚の建設が進行中

「担当している案件の進捗を現場で確認することができ、東京での業務が現場につながっていることを実感しました」

「地域部でいろんな角度から事業を見ていくのは難しいんですけど面白いですね。マイケルの影響で、軸は子どもたちに関わることに、そこから教育や暮らしに直結する農業などに興味を持つようになりました。もちろん、専門的に学んだわけではないですし、軸がふらふらしてたのは、自分の中で若干じっくりこないところがあったんですけど、今は欲張りに様々な分野を経験できればいいかと。教育分野であれば人間開発部、鉄道案件を担当してみたいので社会基盤部など、“課題部”と呼ばれる部署へも行きたいとは思いますが、課題の絞りはまだまだです」

● ドミ共日系社会と鹿児島をつなげて双方を盛り上げたい

2021年7月、JICA2年目の海外OJTでドミニカ共和国を再訪した際、大学時代に訪問した際に記念植樹した日本庭園を見に行き、大きく成長した樹に感動したという。



ドミニカ共和国の植物園の移住者が造園した日本庭園での記念植樹の様子(左上)。

JICA2年目の海外OJTでドミニカ共和国を再訪した際、大きく成長した樹(2021年7月)

「墓石に鹿児島出身者が多くて、知らなかったことに衝撃を受けました。ドミ共に日系人移住地が何か所かあって、20人ぐらい鹿児島県出身の移住者の方々とお会いして、鹿児島弁で話をしたら涙を流して喜んでくださったのが一番心に残っている出来事です。桜島を見て育った自分と同じ鹿児島県出身者が地球の裏側で頑張っていることを誇りに思ったんですよ。いつかドミ共日系社会と鹿児島をつなげるイベントを実施して、お互いを盛り上げていきたいと思うんです。もちろん開発支援もしながら。移住から65年以上が経過していくなかで、日本とのつながりを感じていただけたらと。地方創生で地元も元気になってほしいんです!」

プロフィール



井村 皓一

#マイケルジャクソン

#日系社会

#地方創生

井村 皓一(いむら こういち)
JICA 中南米部 中米・カリブ課
パナマ、コスタリカ担当

1996年福岡県生まれ。生後すぐ鹿児島へ移り19歳まで過ごす。法学部にて憲法と国際法を専攻。入学直後に熊本地震が起こり、被災地でボランティア活動を行う。内閣府国際社会青年育成事業に参加しドミニカ共和国へ。2020年JICA入構。調達・派遣業務部契約第三課で技術協力の機材調達及び国内契約を担当。2021年7月ドミニカ共和国で8週間OJT。2022年5月より中南米部中米・カリブ課でパナマ、コスタリカの担当としてパナマ首都圏都市交通3号線整備事業や地熱発電所開発事業に取り組んでいる。JICA Innovation Quest 運営チームメンバー。
